

INTERVIEW

岩手県知事 達増拓也 氏



【プロフィール】 達増拓也 氏 岩手県盛岡市出身。昭和63年 東京大学法学部卒業、外務省入省。平成8年 衆議院議員（連続4期）。平成19年4月より岩手県知事。趣味は合唱、テニス。座右の銘は「浩然の気」

民意と現場、 行政が一体となって、 医療を地方自治の手に。

聞き手：山田隆司 社団法人地域医療振興協会 地域医療研究所所長

県立病院の改革に取り組んで

山田隆司（聞き手） 今日岩手県の達増拓也知事にお時間をいただきました。達増知事には、へき地・地域医療学会の基調講演をお願いしていますが、岩手県の医療の状況と、自治医大卒業生のことも含めて、今後の方向性をお聞かせいただきたいと思います。

まずは県内の医療の現状について、ご説明いただけますか。

達増拓也 岩手県は、県立病院が21、診療所もあわせると26という全国で最も多い県立病院ネットワークを抱える県です。戦前に、農村に病院をつくらうという運動が盛んで、また『武士道』の著者、新渡戸稲造博

士が岩手県の産業組合（現在の農協）のトップに就任したこともあって、新渡戸博士の人道主義にも刺激されて、農村にどんどん病院ができました。ところが戦後、経営が苦しくなり、借金をして経営を立て直すことも難しくなったため、県が引き受けることになり、県立病院体制ができたという経緯があります。

そのような経緯もあって、現在は、広い県土に充実した県立病院ネットワークがあるのですが、残念なことに、最近は大変厳しい情勢にあって、医師不足、さらにその医師不足を要因とする収入の低迷によって経営も厳しくなっています。

山田 われわれから見ると県内に県立病院が多いというのは奇異な感じがしています。というのは、県立病院というと一般的に県庁所在地やかなり大きな都市だけにぼつぼつとあって3次的な医療を司っているという印象が強いのですが、岩手県では、ほとんど全県に亘る地域の医療を県立病院が支えています。それには、古い歴史の中で医療を支えた組織を県がサポートしてきたということがあるのですね。国民皆保険が整った昭和30年代ぐらいに、国保の病院が多くなったときにも、あまり国保に移管されずに、県立のままで維持されたということですね？

達増 結果として、そうなっていますね。

山田 そうですか。われわれはいろいろな枠組みで公立病院とお付き合いしていますが、それぞれの地域に見合った医療体制作りが必要ではないかと思うのです。ところが県立病院というのは、県に委ねていけば済んでしまうということで、一方で各自治体が地域医療を確保するという苦労をあまりしなくてここまでできてしまったのではという気がするのですが。

達増 岩手には、かつて、全国的に有名になった国保沢内病院や現在の藤沢町民病院など、町村の力で全国的に誇れるようなケースがありますので、市町村が支える医療がひとつの理想としてあることは確かです。医療というのは本来地方自治の不可欠な分野だと思うのです。戦前は内務省がやっていたわけで、戦後、内務省を民主化していくときに、地方自治の中で総合的に医療・福祉・保健が行われるようになればよかったです。中央集権のまま内務省が縦分割されたために、今日の形ができてしまったのだと思います。ですから医療を地方自治の手に取り戻すということが大事だと思います。

山田 国保の施設へ行っているときに思ったことですが、地域にはそれぞれの限界があるにもかかわらず、どこの島、どこのへき地へ行っても、みんなが例えば総合病院が欲しい、産婦人科医が欲しい、透析施設

が欲しいと言います。それは住民が1万人であろうが、2,000人であろうが、500人の島であろうが、レベルの高い医療を隅々まで欲しいという希望は全く同じなのです。ただ、それに対するコストについてはあまり考えられていないし、地域の中でどこまでが必要なのかという議論があまりされてないのではないかという気がしています。そういった意味で、県が支えてきたというのはご苦労が多かったのではないのでしょうか。

達増 防災という分野は、市町村、都道府県、また国の役割分担が比較的うまくいっているのではないかと思います。そもそも自分で身を守るということから始まって、個人、家族、町内会単位の地域、そして市町村、県が動き、ヘリコプターを出さなければならぬ、自衛隊を出さなければならぬときには国が動く。医療にもそういった安全保障的な側面がありますので、重層的なかたちで命や健康を守るというシステムが有効だと思います。そして原点にあるのは、まずは自分で自分を守るという主権者である地域住民の意識を確立するところからだと思います。

山田 住民側の医療者への適切な形での依存や適切な受診のわきまがないと、地域医療の本来の姿が育まれないと思うのですが。

達増 岩手県でも、危機的状況の中で、まずは勤務医の配置を適切な形に改革し、一方で、県民一人ひとりに、自分の健康はまず自分が守るという意識を確立してもらおうという運動に取り組んでいます。

山田 学校の統廃合もそうですが、病院を無床化にするというのは、地域の人たちにとって大きな抵抗があったと思うのです。それを知事が先頭に立たれて説明されていったというのは、頭が下がります。

達増 ありがとうございます。私の場合は、知事として勤務医とのお付き合いがありますし、また同じ世代の先生たちと個人的に話をする機会もあるので、とにかく今回の無床化を進めなければ勤務医の方々が参ってしまうと感じました。そうなったときに一番困るのは住民です。住民のためにもやらなければならないとい

う確信がありました。しかしそういった勤務医の勤務実態や診療応援によってなんとか成り立っている県立病院のシステムの現状が、一般の県民やマスコミには十分知らされていなかったのです。

しかし議論が白熱し深まる中で、最終的に議会も関係予算を承認してくれて、マスコミも、かなり実態を明らかにしていく報道特集を組んでくれました。おかげで、今、岩手県民は、全国的にもかなり医療リテラシーが高くなっていると思います。

山田 従来、MRIやCTなどの高度医療がすぐに受けられる、そういった重装備の医療が質が高く、小さな病院、診療所は医療の質が低いと見なされがちだっ

たと思うのですが、私はそうは思っていないで、住民にとって、細かいところにまで手が届くのはむしろ診療所クラスです。きめ細かく往診に対応したり、あるいは数人で訪問診療などの機能をしっかり持って、重症化した場合にはきちんと2次病院に受け渡す仕組みができれば、地域に根ざした医療を提供するには、診療所がより適していると思います。

達増 今年の春に、自治医科大学が監修した「地域医療テキスト」が出版されましたよね。本屋で発見して、すぐに購入して読んだのですが、このテキストで紹介されているように、医療にはさまざまな形があるということをもっと広げていきたいですよ。

自治医大卒業生の活躍

山田 私は自治医大の卒業生の県支部会にはいろいろ行っているのですが、岩手県の支部会は他とはぜんぜん雰囲気が違うのですね。すごくまとまっていて、支部会に知事がいらっしゃる県というのはほとんどないのですが、達増知事はいつもいらっしゃっている。自治医大の卒業生もグループになって、岩手県の医療をみんなで支えていることが感じられて敬服するところがあります。卒業生の貢献度が岩手県では非常に高いと私は思うのですが、いかがでしょうか。

達増 はい、本当に大変貢献していただいています。人数的にも自治医科大卒業生は80名で、栃木、東京、北海道につぐ全国第4位、また県内定着率も高く87%となっています。本当にありがたいことだと思っています。

山田 われわれからすると、卒業生が大勢県内に残って定着しているというのはいらやましい気はしますが、一方で、卒業生は県立病院などの病院勤務が多いので、公的病院の勤務医がとてもハードであるという状況を考えると卒業生が少し気の毒だなという気が

しないでもありません。そういった勤務医の問題について、知事はどのようにお考えですか。

達増 不断の改革・改善が必要だと思います。よりゆとりをもって患者に接することができるように、コメディカル、医療クラークなども含めたサポート体制を整備しなくてはならないと思います。それも行政が内向きにやるのではなく、自治体病院を開かれた形にしていくことが大事です。幸い、地域住民や患者の側にも病院を支える会、特に産科や小児科に地域のサポートグループができていますので、中をきちんと見てもらって発言してもらおう。あとは、今回、無床化を巡るいろいろな議論もありましたので、県立病院や県医療局が市町村と意見交換するような場を拡充しています。そうしてきちんと外からも見てもらって、周りの人たちにも納得してもらいながら、勤務環境をよくしていくというサイクルが大事だと思います。

山田 知事が言われるように、病院の運営や経営状況、スタッフの勤務状況なども地域の人たちに知っていただいて、それがフィードバックされる。働いている側

も地域のフィードバックを受けて頑張れば評価に繋がる。地域に開かれた病院で頑張った人が報われ

るようなシステムがもう少し進むと、ストレスがあってもやりがいが出てくるのかなという気がします。

健全な医療を守るために

山田 公的病院をとりまく環境は、非常に厳しいというのが現実です。公的病院の立場からすると、現状の医療費では運営を黒字にしていくのはかなり難しい状況ではないかと思っているのですが。

達増 そうですね。今世紀に入ってから急速に進んだ、医療費を含む社会保障費を抑えよう、削ろうという動きは間違いだったと思います。そのしわ寄せが地域医療を危機に陥れたと思います。高齢化社会でもあり、また科学や医学が進歩すれば、それだけ費用もかかるわけですが、ここ数年は財政の論理ありきで、地域医療の実態を悪化させるようなことが行われたと思います。

山田 やはり医療というものはもう少しゆとりをもってできないと…コストだけで動いているわけではないので。公立病院改革ガイドラインにしても、コストの影響が強くて、一律で稼働率70%を切ったら病床を減らしなさいなどというのは、経済学者にはできるかもしれないけれど、医療者からすれば、そんなことで公立病院を評価されたら困る。公立病院改革ガイドラインは一つの偏った典型だという気がしてなりません。

達増 全国知事会で、新たに「この国のあり方検討委員会」を立ち上げました。地方自治や地方自治関係の研究者にまず報告書を出してもらい、それをベースに議論するのですが、その報告書が先日三重県で行われた全国知事会に提出されました。生活を守るには福祉や社会保障の仕組みと、経済雇用の仕組みの組み合わせで見ていかなければ駄目で、それがお互い支えあう関係にあるといった内容のものでした。私もその委員に入りましたので、頑張っていこうと思っています。



聞き手：地域医療研究所所長・「月刊地域医学」編集長 山田隆司

山田 岩手県では、イーハトーヴ情報の森構想というのを進めているようですが、岩手県というのは一つの国のような大きな地域で、岩手という地域の医療を県民みんなで育てていこうというメッセージを私は感じます。

達増 岩手県の、戦後初代の民選知事である国分謙吉知事が亡くなる寸前、枕元に当時の中村直知事と呼んで言ったことというのが「県の寵、けえってねえか（返ってないか）」ということだったのですね。つまり県立病院をすべて県が引き受けたことで、県が財政破綻していないかということです。代々の知事たちは医療に非常に強い関心があって、県民の命を守らなければということと、県財政を破綻させてはならないという、そのせめぎあいを初代からやってきている。私もそれをしっかり引き継いでいかなければいけないと思っています。

地域医療に従事する医師のキャリアパスを実現したい

山田 岩手県の卒業生と話をする、各々自分たちが地域医療で経験してきたことを活かして、地域で改革をしたい、地域でもう少しまともに活躍がしたいという思いを強く感じます。現在はそれぞれの場所で医師としての役目は果たしていても、それぞれに力が分散してしまっています。皆が集まれば日本の中でも手本になるような病院を運営できる力が、岩手県の自治医大卒業生には充分あるという気がしています。もっと卒業生に任せてもらって一つの地域医療のモデルができればいいのではないかなと、私としては希望しています。

達増 そうですね。私もそう思っています。個々の卒業生の皆さんに活躍してもらおうということに加えて、地域医療振興協会という組織と県の連携の形を作っていくか、保健福祉部、医療局で検討しているところ

です。

山田 地域医療、へき地医療を担ってきた者の生涯のキャリアパスというのをつくりたいと思うのです。自治医大に入ったから、こういうチャンスがあって、こんなこともできたというようにしていきたい。自分たちの培ってきた地域医療の形を、われわれなりに実現できる大きな仕組みを作るのが、卒業生の先輩としての務めだと思うのです。自治医大の卒業生が義務年限をこえて、生涯安心して、へき地や困っている地域をサポートできるようなシステムをつくりたい。それができると地域に尽くしたことはよかったのだとみんなが思えるようになると思います。

達増 医療を地方自治の手に取り戻すというのは、日本全体の大事な課題だと思いますが、その中で自治医大卒業生の皆さんや地域医療振興協会が果た



コメント

社団法人地域医療振興協会
沖縄地域医療支援センター センター長

崎原永作先生

私の出身県である沖縄も戦後生き残ったたった64人の医師から始まって岩手県のように県立病院ネットワークを作り上げていった経緯があります。ところが近年、先ほどの言葉を借りれば「県の籠がひっくり返った」状態に陥り、病院事業を支え続けることは困難であるとの認識が広がり、県立病院の独立法人化の議論が盛んになっています。歴史的に県立病院の果たしてきた役割は大きく、今でも沖縄の医療の屋台骨であることは間違いありません。自らが育てた医師によって民間病院群が充実してきている昨今、県立病院の役割の変化も考えるべきですが、県民や職員の心の中に県立病院はそのままであってほしいという思いがあり、次の段階に移れないでいます。とはいえ、県立病院が果たしてきたコアの部分の部分を確実に次の世代に継承するためには何をすべきかという議論をしていかななくてはいけないのも事実。

そのためには、医療の方向性を間違えると一番困るのは住民であり、住民のための改革であるとの強い信念で自ら先頭に立たれ、ややもすると感情論に流れがちな医療改革問題を粘り強く議論を重ねる中で、議会も、マスコミもそして住民も納得させた達増知事の「浩然の気」の極意に沖縄県民も少しでも近づかなければならないと感じた次第です。

す役割というのは, 死活的に重要だと思います. 岩手から, そういった日本全体を変えていくような改革を, 卒業生や協会の皆さんと一緒にやっていきたいと思っています.

山田 地域医療の根源的な問題について深く理解をされて, その中で知事自らがリーダーシップをとられるというのは, ほかの県ではないことだと思ったので, ついつい突っ込んだ不躰な発言になってしまいました, すみません. しかし, 地域住民のためにやっている仕事なので, 医療者側も正しく評価されて, われわれもやりがいを持てる仕組みができると, 広く地域医学を発展させる礎になるのではないかと考えています.

達増 これまでの行政の仕組みでは, 知事のの仕事の中に医療というのは普通に入っていないので. 一方で県民にアンケートをとると関心のある分野のトップは医療です. ですから民意に応えていくためにも知事の頭の中のかなりの部分は医療に割かなければいけないと思っています. 民意と医療現場と行

政が一体になれるような仕組みができれば, まさに地方自治の手に医療を取り戻して先に進めるのだと思います.

山田 そういうお話をうかがって心強いです. 行政と医療人と住民が, いつも磋琢磨して知恵を出し合わないと, 決していい地域医療は実現しないと思います.

最後に, 地域で頑張っている医師たちにメッセージをいただけますか.

達増 「地域医療テキスト」の帯に「海がある, 山がある, 地域医療の現場が, みんなを待っている」というコピーがありました. あの言葉に強い感銘を受けたのですが, そういう熱い思いで地域医療に携わっている皆さんを, しっかり受け止めてその活躍を支えられるような地方自治体でありたいと思っています. そういう志を持った皆さんが, 自己実現を図れるよう頑張っていたきたいと思いますし, 私たちもしっかり支えていきたいと思っています.

山田 達増知事, 今日はお忙しい中, ありがとうございます.

